

「付 - 2」親子が再会する小説の部分

私は卓祇台の上を片付けたものの落ち着かず、また縁側の椅子に坐り直す。

河時栄（ルシーヨ）はただ赤い肌をし、皺くちの顔で泣く赤ん坊だった。くりくりした目は母親似だと誰かが言っていたが、顔の造作がどんなものだったか、もう記憶にない。

「お客様です」

という仲居の声に続いて、幾分かしこまった男の声が「お邪魔します」と言う。

はいってきたのは、肩幅の広い、まるっこい眼鏡をかけた男だ。私は思わず立ち上がって近寄る。

相手の眼が射るように私を見る。二重瞼の目が千鶴に生き写した。

「初めまして。佐藤時郎です」

男は厳粛な顔で畳の上に膝をおとし、手をつく。

「河時根（ルシグン）です。よく来てくれました」

私も膝をつき、できるだけ平静を保って応じる。胸のなかは熱いものでいっぱいだ。

女手ひとつでよくぞここまで育ててくれたという思いが、千鶴の追憶と重なる。

私は卓祇台の向こうに席を勧め、自分の座布団を敷かせようとしたが、時郎は最後までそれを固辞する。

「日本語が通じなかったらどうしようかと心配したのですが、お上手で安心しました」

時郎は私の固さをほぐすように言う。動作にも表情にもどこか無邪気な明かるさがある。

釜山にいる三人の息子とは反対だ。彼らは、私が厳格に育てたせい、どこか屈折したわだかまりをもっていた。

「ちょっと、ビールでも頼みましょう」

私がほっとして床の間の電話を取ろうとするのを、時郎が制する。

「私のためでしたら、車なので飲めませんから」

「少しくらいはよいでしょう」

「いいえ。これでも教師の身なので」

「じゃ、車を置いてタクシーで帰りなさい。どうせ明日は日曜でしょう。明日また取りに来ればいい」

私はもうひと押しする。今日と明日のタクシー代くらい、こちらで立て替えてやってもいいのだ。

「分かりました。そうします」

時郎は潔く折れる。

卓祇台を挟んで向かいあう。自分の気持を引き締めるように、息子の顔をじっと見る。

「あなたには、いつか謝らなければならないと思っていました」

私が居住いを正して言うのに対し、時郎はかぶりを振る。

「ぼくのほうは、岡垣町の徐鎮徹（ツンチョル）さんからお父さんが来られると聞いてこの一カ月、眠れませんでした」

私は時郎が口にしたお父さんという言葉聞き逃さなかった。「アボジ」とは何千回何万回呼ばれたかも知れないが、日本語で「お父さん」と言われたのは初めてだ。

「本当に申し訳ない。あなたたちが苦勞したことは徐さんからあらまし聞きました」

私は深々と頭を下げる。

「それはお互いさまです。つらかったのはむしろ、お父さんのほうだったはずですよ」

時郎はあくまで私をいたわる口調を崩さない。私は目頭が熱くなるのを覚え、言葉を失う。  
「お父さんが日本に連れて来られてからどんなにつらい思いをし、また向こうに帰られてからも苦勞の連続だったことは、母から聞かされました」

「お母さんは私を恨んでいただろうね」

私はやっとの思いで訊く。

「いいえ少しも。夫のやさしかったこと、立派だったことをいつも口にしていました」

息子の言葉に、私は不覚にも涙を落とす。やむを得ない事情があったとはいえ、私が妻子を見捨てたことは厳然たる事実なのだ。見捨てたうえに、この四十数年は、二人の思い出を壁の中に塗り込めるのに費やしたようなものではなかったか。

「連絡も何もしなくて、すまない」

私は畳に手をついて謝罪する。

「お父さん。連絡しようにも、韓国と日本の間は遠かったではありませんか。二つの国は地球上で一番離れていたのかもしれない」

確かに、一衣帯水の距離にありながら、双方の国は背を向け合っていた。李承晩政権やそれに続く軍事政権下では、私たち一般人は日本に渡れなかった。東京を訪問中の金大中氏がK C I Aの手で拉致されたり、韓国に留学していた日本人学生がスパイ容疑で二十年の刑を受けたのも記憶に新しい。

特に1974年、在日韓国人青年が大統領を狙撃し、夫人を死亡させて以後は、政府の反日キャンペーンに拍車がかかった。〔北朝鮮の工作・中継基地日本〕というスローガンのもと、日本から韓国に届く手紙は密かに検閲されているという噂も、全く根拠のない話ではなかった。

「それにお父さんの場合は、日本に対して特別な感情があるはずですよ。無理やり連行され、ろくろく食物も与えられないで、牛馬のような労働をさせられる。反抗すれば半殺しの拷問が待っている。そういう悪魔のような国のことなど、誰だって思い出したくないはずですよ」

私は時郎が言うのを、目を閉じて聞く。なるほど日本は憎かった。しかし、国が憎ければ妻子までも見捨てていいことには決してならないのだ。

「あなたは今だからそういうふうに言えるのであって、幼い頃は、連絡をしない父親を恨めしく思ったのではないですか」

私は顔を上げて問いただす。時郎の眼鏡の奥の目が赤く潤んでいる。私は自分の予想が適中したことを確認する。少なくとも一時期、時郎は私を憎んだはずだ。

「母は、いつかお父さんに会える日が来ると言い続けていました。今は会えない事情があり、その理由は大きくなれば分かる、というのが口癖でした」

時郎は私の問いには直接答えない。その代わり私から視線をそらし、川に面した硝子戸の方に眼をやる。

「すまない」

私はまた詫びる。「徐さんから話を聞いたとき、すぐにでも連絡すべきだった」

「お父さんにも事情があったのでしょうか」

時郎が視軸をまっすぐ私に向ける。温和な物腰よりも、時折みせる強い視線のほうが時郎の本心であることを私は感じる。

先刻とは別の仲居がビールと川魚の佃煮を運んでくる。私たちは改めてビールをつぎ合い、乾杯をする。

釜山の息子たちは、今でも私と酒を飲むのを好まない。手を二本添えてビールをついだり、目上の者

に対して横向きで盃の酒を口に入れなければならない、古来の作法を煙たがった。

私以外の人間と酒席を設けるのであれば、自分の思い通りに振舞え、煙草も気兼ねなく吸えるからだ。

私は時郎とどことなく気持が通じるのを覚える。初対面の商売上の相手を前にしたときには決して生じない感覚だ。

40年以上も別れていたのに、時郎に向かうこの親近感が不思議でならない。そのくつろぎはまっすぐ時郎のほうから醸し出されるものだ。それは、私が千鶴や時郎のことをほとんど忘れ去っていたのに対し、私の存在のほうは彼らのなかに常に喚び起こされていたからに違いない。

千鶴と知り合い一緒に暮らした期間は2年に満たない。しかしそれがその後の40数年と優に括抗したのだとすれば、彼女は私との約束を立派に守ったことになる。

私の記憶にある千鶴の面影はまだ20歳を3つか4つ越したばかりの若い女だが、彼女の精神は何故か私とともに年輪を加え、今でも対等に話ができそうな思いがする。

「母さんは何をして生活を支えていましたか」

私は釜山の息子に話すのとは違った口調になる。空になったコップに、時郎が待ち構えていたようにビールをつぎ足してくれる。

「靴墨の行商です」

「行商？靴墨を売って歩くのですか」

私は耳を疑う。靴磨きなら釜山では今でもよい商売だが、靴墨の行商などは聞いたことがない。

「漫然と売るのではなく、役所とか学校とか工場を回るのです。小学校に上がる前はぼくもよくついて行っていました。1日に2ヶ所くらいは回れます。学校だったら職員室に行って、先生たちの靴を無料で磨いてやるのです。そのあとよければ靴墨を買ってもらう。いわゆる実演販売です。

母が磨いた靴の仕上がりは、持ち主がびっくりするほどでした。買い手は靴墨が上等だからピカピカになると思っていたようですが、実は母の磨き方が上手だったのです。

それはそれは精魂込めて磨いていましたから。1ヶ所で20個か30個は売れました。

ぼくが教師になったのも、学校にあがる前からそうやって学校に出入りしていたからかな、と今にして思います」

時郎が淡々と述べれば述べるほど、私は2人の生活苦を痛切に感じる。

「そういう得意先回りは、荷物を背負って歩いたのですか」

「ええ。背中に靴墨を入れた風呂敷包みを背負い、ぼくの手をひいてバスに乗り、何キロも歩きました。

ぼくが小学校にはいると、母は中古の自転車を買って乗る練習をしました。ヨロヨロ運転なのにもう町の中に出て行くので、子供心にも心配でした。そのあとスクーターになり、ぼくが中学生のときは、運転免許を取り、ライトバンを運転して隣の県まで行商に出ていました。

夏休みなどはぼくも車に乗って行商に出ました。旅館には泊まらず、車の中で夜をあかして、食事もキャンプ用のコンロで作るのです。海辺や田んぼの中で食べる御飯は、どんな御馳走よりもおいしいと思いました。北は鳥取、南は熊本くらいまで行ったでしょうか。

ぼくが結婚して、学校の勤めの関係で家を出たあとも、1人で行商に出ていました。もうたいがいやめたらどうかと勤めても、得意先があてにして待っているからと、ほんの1日ばかり休んで次の日はもう出かけていました」

時郎の話を、私は慙愧の思いで聞く。

子供の手を引き、風呂敷包みを背負って行商する20代の千鶴。自転車に乗って学校回りをする30代の彼女。車を運転して遠出をする40代の有様。それらが次々と私の頭に思い浮かぶ。

そして奇妙にも、それぞれの年代における彼女が、私の知っている2年間の千鶴と結びつくのだ。

「お母さんは、若い頃から頑張り屋だった。芯が強く、苦勞が重なっても暗い顔は見せなかった。」

言いながら私は涙声になる。私は思い切り彼女を賞讃してやりたい。女手ひとつで戦後を切り抜け、息子を教師にした働きに比べれば、私の成功などタカが知れている。しかも再婚もせず別れた男のことを息子に語り続けた千鶴と、トカゲの尾のように彼女を切り捨てて生きてきた私の差は歴然としている。

「本当にすまなかった」

私は頭を垂れる。千鶴が目の前にいるなら土下座してでも謝りたい。

「お父さん、こうやって会えたのですから、詫びることはなんにもありません。ぼくは嬉しくてたまりません」

時郎が眼鏡をはずして、涙を拭くのを、私は胸を詰まらせて眺める。

「実はここに来る前、お父さんがすべてを金で解決する腹でいるならすぐに帰ろうと決めていたのです」

三たび海峡を渡ってよかったと思う。渡らない限り、私は自分の人生に決着をつけることができなかつたはずだ。「母からお父さんのことはよく聞かされました。今度は、お父さんの口から母のことを聞いてみたいのです」

時郎は眼鏡をかけ直し、泣き笑いの顔で言う。

私は千鶴との生活をまだ誰にも話していないことに気がつく。あれ程強烈な思い出を、自分ひとりの胸に秘め続けてきたのだ。……